

研究ノート

在日百年のファミリー・ライフストーリー 河家の場合【第二部：二世から三世へ】

猿 橋 順 子*

1. はじめに

本稿は、同タイトルの第一部「渡日から「千里」創業まで」の続編である¹⁾。五世代にわたり東京都世田谷区の同じ地所で暮らしてきた、ひとつの在日コリアン家族について「ファミリー・ライフストーリー」の手法（次節で詳述）を提案しながら、その来し方を編んでいる。

在日コリアンは、日本による朝鮮半島の植民地支配の歴史によってもたらされた社会的マイノリティである。その定義に照らして言えば、1910 年から 1945 年の間に日本で生活の基盤をもち、1945 年以降も日本に暮らし続けた人びととその子孫たちを指す。しかし、数字で示されるように、年月の区切りをもって機械的に分けることができないのが、人びとの暮らしであり家族のありようである。

たとえば、金賛汀は『在日コリアン百年史』²⁾のなかで、その「百年」が示す期間を明記してはいない。むしろ「ざっと百年」(p.251)と雑駁に提示している。同時に、1875 年の江華島事件、翌 1876 年の日朝修好条規をきっかけに、朝鮮人労働者が日本列島に移り住むようになった経緯を記し、記録に遺

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

1) 『青山国際政経論集』113 号、135-166 頁、2024 年(<<https://doi.org/10.34321/TF02017900>>).

2) 金賛汀『在日コリアン百年史』三五館、1997 年。

されている炭鉱夫の雇用のもっとも古いものが1897年であることに注目している(p.17)。そのちょうど百年後の1997年が同書の刊行年となっていることは、偶然の一致とは思えない。ともあれ、同書は在日コリアンの歴史を韓国併合の1910年より前から始まっているものとみなしている一例だと言えよう。

あるいは、1945年の日本の第二次世界大戦の敗戦による朝鮮半島の解放後も、人びとの行き来はさまざまな動機と事情と手段で試みられた。とりわけ済州島四・三事件(1948年)および朝鮮戦争(1950～1953)により、多くの人びとがふたたび郷里から脱出せざるを得なくなった。闇船や漁船に隠れての航海は、果たせなかったものも無数にあらうが、その全容については明らかにしようもない。完遂されたものであっても語られることは少ない³⁾。しかし、その中には確実に、在日コリアンとしての自己規定を基軸として生きている人達がいる⁴⁾。

このように、時間や時代の区切りというのは、幾重にも幾通りにも設定しうる。だから「在日コリアン家族の百年史」と言っても、各人が、何らかの出来事を境目に「自分達家族にとっての在日コリアンであることの起点」を探り当てることから始まるとも言えるだろう。来歴や生い立ちの異なるふたりが婚姻関係を結ぶことで家族というものが成立することを考えると、ひとつの家族が「在日百年」の感覚を共有していることは、決して当たり前のことではない。ファミリー・ライフストーリーを編むことは、むしろその「当たり前でなさ」や「稀有であること」を浮かび上がらせもすることだろう。

3) 日本と朝鮮半島を非公式に行き来せざるを得なかった人びとの事情、その語りにくさを示すひとつの事例として、尹紫遠氏の足跡を辿った宋恵媛・望月優大『密航のち洗濯——ときどき作家』(柏書房、2024年)がある。

4) 1945年以降に日本に渡り、在日コリアンとして生きてきた人物として金時鐘がいる。金石範・金時鐘『なぜ書きつづけてきたか なぜ沈黙してきたか——済州島四・三事件の記憶と文学』(平凡社、2001年)には、その語りにくさが対談の形式によって引き出されている。

2. ファミリー・ライフストーリーの方法論

ファミリー・ライフストーリーの方法論的な特徴として、第一部⁵⁾で以下の4点を挙げた。

- ① 歴史のための口述史という立場より、家族史を深く理解し、家族史を編むことの意義を広く認識するための資源として歴史を活用する立場を優先させる。
- ② 現在、もしくは近い将来、数世代先の未来にとっての過去の出来事や経験、語り継がれてきた物語の意味を考え、継承の意義を探究する。
- ③ 家族構成員各人によって異なる意味づけの共存と、それらが同居することをめぐる解釈から、多様性の意義を探究する。
- ④ 語られる世界の意味内容に加え、調査者を含め、インタビュー場面において展開される関係性に注目する。

ここでは、上記の第四点について考察を加えておきたい。今回、構想しているファミリー・ライフストーリーは、対話的構築主義に立脚するライフストーリー・インタビュー法を援用している。ライフストーリー・インタビューは、社会学や歴史学で取られるオーラルヒストリー（口述史）インタビューに近いものの、言語学からの知見を取り入れ、語り手とインタビュアーの相互行為によって実現し、収集される語りという側面に重きを置いている⁶⁾。インタビューという行為も、私たちの社会活動のひとつである。産出される語りには、語り手が辿ってきた道程、置かれている「今、ここ」の社会的文脈に加え、眼前の聞き手との関係性が映し出される。

エスノグラフィーにおいてインタビューの語りは、その他の質的調査法（たとえば参与観察）で得られた知見と統合して解釈されるものである。筆者も、

5) 前掲、140-141 頁。

6) 桜井厚『インタビューの社会学——ライフストーリーの聞き方』せりか書房、2002 年、30 頁。

インタビューをきっかけに、河家の「今」（たとえば「千里」の営業や、ソヘグムの公演、民族団体や国際交流イベント、親族の集まりなど）に参加することがある。そのような場面でも、対話的構築主義の観点に立ち、出来事を「観察する」という立場ではなく、筆者もその一部となって作り出される相互行為の中にあるものとして捉え、その過程に注目する。それは必ずしも「語り手と聞き手」、「調査者と協力者」、「在日コリアンと日本人」といった一対一の対をなした関係性の束ではなく、その場に介在する人びとによって、その都度作り出される複合的で流動的な関係性という側面を備える。それをどう文章にまとめていくかは、また別の課題であり、挑戦的試行でもあると考えている。

翻って、ライフストーリー・インタビューの眼目のひとつである対話的構築主義は、主にインタビュー場面あるいはインタビューデータの分析場面について議論、検討がなされている。録音した発話を文字に置き換える作業において、どれほど詳細かつ厳密にトランスクリプト・ルールに従おうとも、声のトーンや声色、表情やしぐさなどの非言語情報、場面の情報などは、かなりの程度そぎ落とされるものである。それでも、研究者は文字化したインタビューの一部を切り取って、研究論文に掲載し、論じる過程に進む。論文であれ書籍であれ、抜粋して埋め込む際には、焦点化されたテーマや分析の着目点、想定読者等に応じて編集が施される。研究者各人が独自にもつ問題意識やテーマの中に文脈付けられるインタビューからの抜粋は、かつて語り手と聞き手の相互行為のプロセス（流れ）の中にあったものとは異なる流れの中に挿入されることになり、当然、その再文脈化により、語りの中核的な意味も趣きも異なったものになることがある。

果たして、この再文脈化の段階において、対話的構築主義はどう扱うべきなのか。仮に、インタビュー時や文字化、分析の段階で重視されていた対話的構築主義が、文章化や論文化の段階において置き去りにされるのならば、それは結果的に対話的構築主義の部分的な適用ということになるのではないだろうか。とりわけ、インタビュー時の対話的構築主義の尊重は、調査協力者との信頼関係（ラポール）にも関係するものと位置づけられている。自著も含め⁷⁾、質的

研究法の教科書において「ラポール」と、フランス語のまま持ち込まれているこの概念は、あたかも「特別なもの」のような響きをまとっている。それがインタビュー場面など、特定の場面のみに用いられる概念なのであれば、それこそが不信を誘うものになりかねないだろうか。

調査する場面と、それを文字に書き記し、まとまりと目的をもったひとつの作品に仕上げるまで、その全容において対話的構築主義はどこまで可能で、それを難しくさせる事情、そこから離れる局面は、いつ、どのように認められるのか。出来事やインタビューを書き言葉に転写したもの、作品になる途上の「文字に変換されたもの」を届けながら継続する調査活動の中で、その点に注意を払いながら実施していく。この意味において、河家のファミリー・ライフストーリーはテキスト化、作品化、論文化とその後も含め、常時取り組み途上のプロジェクトなのだと考えている。

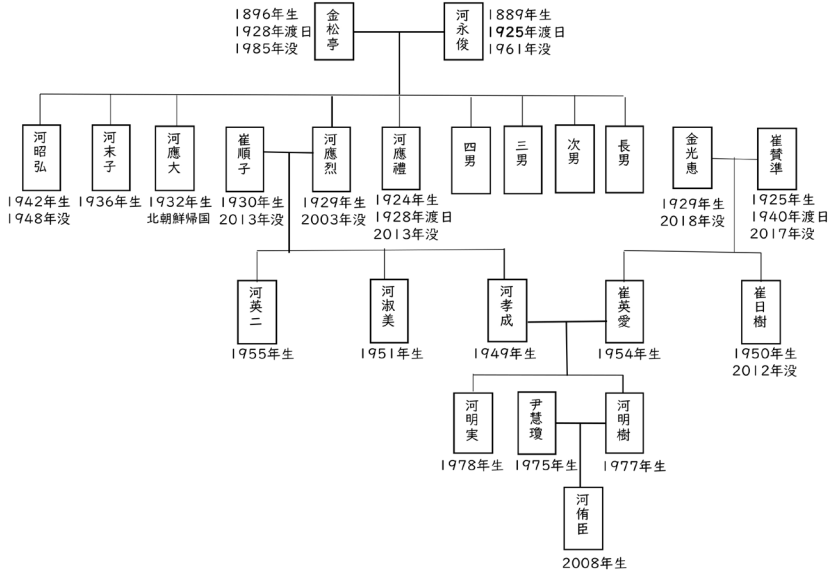
3. 第一部のあらすじ

1889年に朝鮮半島全羅道光州の農家に生まれた河永俊さんは、1925年、36歳の時に下関を経由して東京世田谷へ移り住んだ。仕事を求めての渡日で、日雇いの「人夫」として働き、家族に仕送りをしていた。妻の松亭さん（1896年生まれ）との間に子どもは5人いたが、男児4人が亡くなり、松亭さんは一人残った女兒、應禮さんを連れて、夫の渡日に遅れること3年、1928年に世田谷にやってきた。夫婦は翌1929年、男児（應烈さん）を授かる。続いて男（應大さん 1932年生）・女（末子さん 1936年生）・男（昭弘さん 1942年生）と3人の子宝に恵まれ、7人家族となった。

当時、世田谷の上馬、中里、駒沢地域には全羅道出身者や慶尚道出身者が多く暮らしており、点在する朝鮮人集住地を形成していた。1930年代まで、田畑が広がっていた世田谷の地では、誰しものが自給を兼ねて畑を作って野菜や果物を栽培しており、家長の永俊さんは日雇い労働者として現金収入を得ながら、

7) 末田清子・抱井尚子・田崎勝也・猿橋順子（編著）『コミュニケーション研究法』ナカニシヤ、2011年。

家族は畑で取れた作物や料理を交換するなど、日本人を含め地域の人々と緩やかな相互扶助関係を築いていた。



日本のポツダム宣言の受諾は、朝鮮半島の解放を意味した。それまで日本に暮らしていた朝鮮半島出身者の多くは故郷に帰ったが、河家は東京世田谷で暮らし続けた。高齢となり身体をこわした永俊さんに変わり、松亭さんと長男の應烈さんが主たる家計を担うようになった。次男の應大さんは日本の学校で勉学を継続させた。次女の末子さん、三男の昭弘さんは世田谷区三宿に開校した朝鮮初級学校に通い始めた。1948年11月、下校途中の交通事故で、昭弘さんは還らぬ人となる。

翌年、應烈さんは、母、松亭さんが探してきた全羅道出身の崔順子さんと結婚し、二男一女を授かる。長男の孝成さん（1949年生まれ）が現在の河家の家長である。1961年に永俊さんが亡くなった後、次男の應大さんは、日本社会で望みをもつことができず、新潟港から出港する朝鮮民主主義人民共和国行

きの船に乗った。タクシーと朝鮮学校のスクールバスの運転手をしていた應烈さんは、母の松亭さん、妻の順子さんとともに自宅の一部を改築し、焼肉店の「千里」を創業する。1965年のことである。應烈さんの三人の子ども達は、三宿の朝鮮初級学校、北区十条の朝鮮中高級学校、小平市の朝鮮大学校で民族教育を受けて育った。本稿は、應烈さんの長男、孝成さんの大学卒業後から始まるストーリーである。

河家百年のファミリー・ライフストーリー

二世から三世へ

1. 孝成さんの職歴

河孝成さん（在日コリアン三世、1949年東京世田谷生まれ）は小学校から高校まで朝鮮学校に通い、東京都小平市にある朝鮮大学校に進学した。大学入学時は朝鮮学校の先生になるつもりだった。それを目指していたというよりも、周りの流れに沿って、そういうものかなと思っていたのだそうだ。大学では勉強よりも、仲間達と交流することを楽しんだ。吹奏楽部に入部しホルンも続けた。演奏会では指揮者をつとめた。大きなホールで大勢の楽団員を率いる孝成さんの勇姿が、「卒業記念」として作成された河家の家族アルバムに収められている。

朝鮮大学校を卒業した後、孝成さんは予定していたとおり、朝鮮学校の先生になった。最初の赴任先は広島だった。

孝成さん：広島の学校は山のふもとにあって不便でたいへん。雨なんか降ったらさらにたいへん。おばあちゃん（松亭さん）が頼むから早く帰してくれて。校長先生と談判して（東京に）呼び戻された。

祖母の金松亭さんにとって、孫の孝成さんは大切な河家の長男で、事故で亡くした我が子（昭弘さん、1942-1948）の「生まれ変わり」でもある。校長先生をはじめ組織の「お偉方」に「代が途切れるから帰してくれ」と一歩も譲らなかったそうだ。四年間教員をつとめ、東京に戻るようになった。それについてどう思ったかを尋ねると孝成さんはひょうひょうと答える。

孝成さん：問題児（教師）だったから、（学校や学生にとって）よかったかもしれないよ。授業が始まる前に豚足の話をしたりしてね。だって、くだらない話をしないと学生⁸⁾ がついてこない。

「問題児（教師）」というのは孝成さん特有の自虐的表現、謙遜である。「山のふもとで不便でたいへん」なのは、車を所持している孝成さんや、寮生活をしている学生達ではなく、公共交通機関を使って通学する通いの学生達ということだ。孝成さんは教壇に立ちながら、可能な限り、遠路を通ってくる教え子達の送り迎えもしていた。

寮生活をしている学生達は、四国一円、鳥取や島根などの中国地方出身の子どもたちである。休みの日は、家庭訪問をする。どこへ行っても「よく来てくれた」と歓待を受けた。ご馳走を準備し、振る舞い、お土産をもたせてくれる。決して豊かな家庭ではないのにお金を包んでくれる家庭もあった。「子どもをよろしくお願いします」と深々と頭を下げられる。あたたかい、ありがたい、という気持ちと共に、切なさもこみ上げ、子ども達をしっかりと見てあげなくてはいけないと思いを新たにす。

四年間という短い教師生活で、今から五十年も前のことである。それなのに、いまだに毎年訪ねて来てくれる教え子たちがいる。

英愛さん：毎年山口や埼玉から来てくれるんです。そういう人から話を聞いたら面白い話が聞けるかもしれませんよ。来たらね、（孝成さんが）東京を案内する。

孝成さん：昔はそういう絆がありましたねえ。

祖母、松亭さんの頑とした申し入れによって、東京に呼び戻された孝成さんは、当時、文京区の白山にあった朝鮮出版会館ビル内のキョジットン（教職員組合）に配属となった。月に1回発行されるタブロイド判の新聞『民族教育』の発刊に携わった。記者となった孝成さんの仕事は、日本各地の朝鮮学校をまわり、先生や学生、学校を取り巻く人びとの話を聞いて記事にまとめることで

8) 朝鮮学校では学齢にかかわらず「学生」と呼ぶ。以下、本稿での記述もこれに倣う。

ある。取材先は、編集長から行き先を指定されることもあったが、おおむね自分で決めることができた。朝鮮大学校時代の校友の伝手を頼って、北は東北、南は九州までを駆け巡った。

かつての学友たちは、再会を喜び、その土地、その土地の名産品を食べに、銘酒を飲みに連れて行ってくれる。実は、記事を書くことに、さほど魅力は感じなかった。訪ねて行って話を聞けば、「記事のネタ」に困ることはなかった。だから、原稿の締切りに苦しめられたという記憶もないのだが、朝鮮語であれ日本語であれ「(文筆活動に) やりがいを見出すというところまではいかなかったなあ」と若かりし日の自分を思い出して言う。それよりも、それぞれの土地で先生となり、民族教育に励む旧友の日々の活動や思い、悩みなどを聞くこと、その人たちに紹介してもらって人のつながりが広がっていくことが楽しかった。今で言う「ネットワーキング」である。人生の伴侶となる英愛さんと出会ったのも、この職場にいた時だった。

4, 5 年、記者の仕事をした後に、金融業に転職した。そこで金融と不動産が緊密な関係にあることを学び、縁あって不動産の会社に転職した。この時期のことを孝成さんは「サラリーマン時代」と呼ぶ。金融と不動産のからくりを把握していれば、将来、どのような問題が起きるかを予測し、その問題を回避するための解決策のオプションを提案することができる。それを相手が分かることばで説明してあげれば、納得してオプションの中から選択し、問題を回避・解決することができる。そうしていくと感謝してもらえる。人の役に立っていると感じられ、やりがいを見出すことができた。しかも不動産は額が大きい。親戚の間で意見が分かれ、深刻な対立に発展することもある。そういう場面で、決断を急がせずにじっくりと話を聞く孝成さんのコミュニケーションは有効だった。営業マンとしていい成績を上げた。そのとき、対話の相手が在日コリアンか日本人であるかは関係がなかった。記者時代に培った、人のもとを訪ねて行き、心を開いて誠実に、よく話を聞くというスキルが社会の役に立つと実感され、孝成さんの生業となったのである。

孝成さん：ぼくね、そんなことは誰にでもできることだと思っていたの。特別な技（わざ）じゃなしにね。それがね、どうも誰でもできるってわけじゃないみたい。営業成績が伸びて、上司に褒められたりしてね、あ、これ、誰でもできることじゃないんだって、そこではじめて気づいたんですね。人の話が聞けない人って意外と多いらしいですよ。

好きなことが実は得意なことで、価値のあることだった。自分の「強み」を知ることは自信につながる。手応えを感じた孝成さんは、独立して不動産業を起業した。

孝成さん：不動産屋さんっていうと、土地や建物があって、それを売っている人っていうイメージがあるでしょう。そういうことじゃないんだな。たとえば事業やりながら借金しちゃっている人がいる。その借金を放っておいたら不動産を手放さなくちゃならなくなるかもしれない。借金があったとしても、ちゃんとした銀行から借りていればいいんだけど、金利が高い消費者金融とかから借りちゃっている人もいる。元本の返済までいなくて、金利だけを払い続けている人もいる。そのままにしておいたら、いずれ不動産を手放さなくちゃならなくなることが、話を聞いて臆本を見れば、ひと目で分かるわけですよ。だから、このままじゃこの先困りますよと、解決策は不動産を手放すことなのか、それとも（融資の）借り換えをすることなのか。手放すといったって、その家族は暮らしていかなくちゃならない。何人家族で何歳の子どもがいて、どうやって暮らしているかを知らないと、どういう住まいが必要か、分からないじゃないですか。そうやって家族の暮らしの中に入って話を聞いていくと、何が必要なのか、分かるんですよ、その少し先の暮らしのために。それを、そうですよねって話して、納得してもらって提案すると、ああよかった、助かった、ってなる。こっちも、ああよかったって思う。それが大事なんです。

その後、40代半ばに会社の経営がうまくいなくなり清算した。その時期（1990年代前半）は、時代的にバブル景気の崩壊に合致する。「やはりバブル（景気の崩壊）で経営が難しくなったんですか？」と聞くと、「バブルって私、いまだによく分からないんだ。あれって何だったんですかね？」と反対に聞かれてしまった。経営が立ちゆかなくなったことについては、日本の景気が原因ではなく、あくまでも「私が経営者として甘かった」と自分の力量の問題であったと言い切る。

猿橋：そうやって土地や物件をあちこち色々と見ていると、目が肥えてきて、いい物件に出会って、こっちに移り住もうかなとか、引っ越しや住み替えを考えたりすることってなかったんですか？

孝成さん：（驚いた様子で）ああ、それはなかったな。そういうこと考えたことなかった。一度もない。

英愛さん：それはなかったですね。守ることに必死だったからじゃないですか。たまーに、「年とったら田舎でのんびり暮らすのもののいいね」ぐらいは話したことあるけど。でも、そう言うときでも「誰か、ここ借りてくれる人いるかなあ」って（孝成さんは）言うから、ここを手放すことは考えてないってことですよね。ここを守っていく、それはずうっと、もうそれは当たり前のこととしてあるんじゃないかな。

孝成さん：人の話を聞いて、売る必要がある人と、買う必要がある人をつなぐっていう仕事のしかたをしていたから、不動産そのものもいいとか悪いとか、あんまり興味なかったんだな。もうちょっとその辺、欲をかいいたら（会社の経営にとっては）よかったのかもしれない。だから（経営者に）向いてなかったんですよ。

猿橋：仕事としてやりがいは。

孝成さん：それはありましたね。やりがいがありました。楽しかった。

四十代半ば、働き盛りの時に不動産業から撤退した孝成さんは、その後、「千里」の二代目として焼肉店の経営に携わるようになる。教員、記者、金融、不動産、飲食と、まったく異なる業種を転々としたように見えるキャリアパスだが、人と交わり、人と人をつなぐ。丁寧なコミュニケーションをないがしろにせず、問題解決の提案をする。この点において孝成さんの職業観に一貫性を見た。

2. 英愛さんの生い立ち

孝成さんが伴侶の英愛さんと出会ったのは、孝成さんが広島から東京に戻り、東京の朝鮮出版会館ビルで働き始めた時である。英愛さんも同じビルで事務員をしていた。ここで、英愛さんの家族の来歴についても触れておく。

新潟県高等学校退職者が、戦前および戦中の体験記を集めて刊行した『教育の墓標——戦前・戦中教育と私』という書籍がある。刊行の目的は、戦後五十年を前に、かつて学校教育が侵略主義と軍国主義に加担したことを反省し、同じ過ちを繰り返さないためであると記されている。その中に、英愛さんの父、崔賛準さんのインタビューが掲載されている⁹⁾。崔賛準さんへのインタビューのまとめは「特別寄稿」として編まれ、29人の記録の中で、唯一の朝鮮人である。そこから部分抜粋して来歴を紹介する。

9) 新潟県高等学校退職者の会（編）『教育の墓標——戦前・戦中教育と私』新潟日報事業社、1989年、229-237頁。高校教諭ではない崔賛準さんのインタビュー記録を掲載することになった経緯は以下のように記載されている。

私たちが「戦前・戦中の教育は何であったか」を問う時、戦前・戦中教育の中でもっとも差別され、迫害され、義性をしいられた人たちの怒り、悲しみの山並みを深く思い出す必要があります。

そこで、「教育の墓標」編集委員会では、戦前・戦中教育を根底から告発する立場にある方々の体験をのせることにしました。

そして、編集委員の風間系司と高山弘は、崔賛準氏（長岡市喜多町在住）を訪ね、朝鮮で受けた教育を中心にした体験をお聞きしました。ここに紹介した文章は、そこで聞いた内容を高山弘がまとめたものです。（pp.236-237）

なお、本稿では、この記事から渡日後の部分を中心に、参照して掲載した。

崔賛準さんは1925年8月12日に慶尚南道南海郡二東面茶丁里に6人きょうだいの末子として生まれた。家は農家で、幼い頃から賛準さんは農作業を手伝うかわら、夜学（書堂、ソダン）で朝鮮語の読み書きと計算、日本語のひらがなとカタカナを学んだ。兄たちは、これからはしっかりと学問をしなくてはならないと考え、賛準さんが11歳の時（1936年）に、朝鮮総督府設置の小学校へ通う環境を作ってくれた¹⁰⁾。編入試験を受けて、二東公立尋常小学校の四年生に入ったが、朝鮮語の使用は一切禁止され、日本語のみで、入った当初はほとんど授業内容が分からなかった。徐々に日本語での学習に馴染んでいくようになるが、日本語を理解するようになってから受けた教育は、もっぱら天皇を神と仰ぐ皇民化教育だった。

1939年に朝鮮人の姓を日本の姓に改めさせる創氏改名政策により「松岡」と名乗るようになる。1940年、15歳の時に大阪で働いていた兄から「商業学校に入れてやる」と言われ渡日した。「松岡」の姓を使い、学校に通いながら、鉄工所、電気溶接、道路工事に従事した。その頃について「きびしい生活の連続だった」と記録されている。1945年、日本が無条件降伏をした8月には、長野県の本曾福島で林道工事に従事していた。すぐにも帰国したいとはやる気持ちはあったが、実家の貧しさを思うにつけ、「手ぶらでは帰れない」、「親に榮をさせたい」、そう思っているうちに帰国の機会を逸してしまった。

行商をしたり、溶接工として働いた後、朝鮮総連の専従（常勤職員）となった。民族組織で働くようになってからは本名の「崔」を名乗った。後にパチンコ店を開業する。

寄稿文の最終ページには、1960年頃に撮影された家族4人の写真が掲載されている。妻の金光恵さん（1929年生まれ）と娘の英愛さんはチマチョゴリ姿である。真面目な顔つきでカメラに収まる子ども達とは対照的に、にこやか

10) 朝鮮半島に設立された日本の公立学校の就学率は、1930年後頃は10パーセント、1945年は35パーセントだったという（李殷直 2002, p.12）。

な笑顔で映っている光恵さんは、今の英愛さんにとってもよく似ている。

崔英愛さんは、賛準さんと光恵さん夫婦の長女として、新潟県長岡市に生まれた。5つ年上の兄がいた。「英愛（ヨンエ）」という名前はトルリムチャ¹¹⁾で四国に暮らしていたクナボジ（父の兄）がつけてくれた。母は10人きょうだいの一番上で、英愛さんが子どもの頃、母方の実家は旅館をやっていた。そのため、夏休みや冬休みの長期休暇ともなると、いとこ達が集まって大賑わいとなった。

記憶の中にある「遊び」は、蜂の巣を落として割り、中から蜂の子を出し、フライパンで炒ったのだと言う。英愛さん自身は「気持ちが悪くて」食べなかったが、いとこ達に食べさせていたそう。お兄さんは、2つか3つしか年の違わない叔父さんと一緒に、川に罟を仕掛けてウナギを捕まえる。一匹は「おじいちゃんに献上」し、残りは売りに行って「お小遣いの足し」にしていた。同じ時間、同じ場所に居たとしても、5つ違いの兄と一緒に遊んだ記憶は「ほとんどない」と言うのだが、二人とも「遅い」幼少期だったようである。

英愛さんが学齢期に達したとき、新潟には朝鮮学校がなかった。新潟市立沼垂小学校に入学した。新潟地震（1964年6月16日）の記憶が鮮烈である。給食の時間だった。大きな揺れで机の下に潜ったが、その時とっさに脱脂粉乳を持って潜ったことを覚えている。それほど大事だったのかと思いきや、むしろ「大の苦手」で、それを「こぼしたくない」と思ったからだったそう。揺れが収まってから屋上に避難し、そこから校庭に亀裂が入っているのを見て地震の威力を実感した。引き取りがなかなか来ず、心細い思いで待っていた。ようやく迎えが来て帰ったところ、英愛さん一家が暮らしていた家屋は倒壊しており、その日からしばらくは外で夜を明かさざるを得なかったのだと言う。

五年生までは日本の公立学校に通った。小学校六年生から朝鮮学校に通うため、群馬県高崎¹²⁾で寮生活が始まった。親元を離れなくてはならなかった。

11) 一族の名前の付け方で、何代目と分かるよう定められたもの。輩行字または行列字ともいう。

12) 1948年開学時は初級学校のみ。1964年に中学部を併設。1972年に前橋に移転。

なぜ転校するのか、はっきりと親からその理由を聞かされたことはなかったの
で、今となっては推測に頼るしかない。父は組織の活動に熱心に身を投じてい
たから、そこでの事情があったのかもしれない。あるいは新潟地震で住居が倒
壊し、新しい家に移り住み、母は焼肉とラーメンを出す飲食店を始めた。家の
経済的事情、労働環境などがそうさせたのかもしれない。

猿橋：日本の学校にも通っていたんですね。

英愛さん：五年生までね。「サイ、サイ」ってからかわれてね。

孝成さん：そんなのあなた、負けないでしょう？

英愛さん：負けないわよ。ただそういうことあったなあっていうだけ。

猿橋：六年生から朝鮮学校。

英愛さん：そう。親元離れて寮生活。その頃は新潟、山形、長野、栃木から来
た子もいたかな。私より小さい子もいる。そういう中で、トイレでお菓
子を食べている子を見たりね。

猿橋：トイレでお菓子を食べる？先生に見つからないように？

英愛さん：親から送られてくるでしょう。親はたくさん送っても、それをみん
なで分けられる子もいれば、人にあげられない子もいる。人にあげられ
ない子はトイレで食べる。ひとりでこっそり。美味しそうなさくらんぼ
がどっさり送られてくる。「わあああ！きれい！」ってなって、「さあ、
みんなで食べよう」ってできる子もいるけれど、ひとつずつしかあげら
れない子もいる。さくらんぼって2つつながっているのもあるでしょう。
それを1つ1つに分けてしかあげられないとか。1つもあげられない子
もいる。そういう中に入っていく。それは、良いとか悪いとか、人にあ
げられない子を責めるとか、トイレで食べている子が可哀想とか、そう
いうことじゃなくて、そういう世界なんだなあって、そこに入っていっ
て、見て、気づかされるということですよ。

幼いうちから親元を離れ、学校で学ぶ我が子に、食べ物を送る。とっておき

の、選りすぐりの品々なのかもしれない。それを送る時の親の気持ち。それを
受け取った時の子どもの気持ち。受け取った品物を、何の躊躇もなく周りの人
に分けてあげられる子。本当は分けたくないけど、分けなくちゃいけないと無
理をする子。無理ができる子。どうしても分けてあげられない子。分けられな
い事情も理由も、人それぞれであろう。その背後にある事情、その時々、ひ
とひとりひとりの気持ちは当人にしか分からない。当人にさえ、分からない、うま
く説明できない部分もきっとあるだろう。どっちが良いとか悪いとかではなく
て、そういう「環境」に英愛さんもまた身を置いていたということである。六
年生から朝鮮学校に転入した英愛さんが、生活の面でも学習の面でも躓くこ
とがなかったのは、その時の担任だった安先生のおかげだった。「本当にすば
らしい先生。私の恩師で、今でも季節のご挨拶を欠かさず続けています」と気持
ちを込めて言う。

楽しいこともある。母は季節の変わり目になると、地域の母親達、4、5人
で連れ立って、高崎に来たのだという。

英愛さん：寒くなる前に毛布を風呂敷に包んで背負って来るんです。それで学
校が休みの日に学校の近くの観光地に遊びに行く。高崎観音（高崎白衣
大観音）とか、伊香保温泉とかに行った記憶があります。普段は子ども
が家にいないわけだから、子育てのことを考えずに一生懸命働く。一生
懸命働いて、なるべくお金を貯めて、お土産をいっぱい持って来る。近
くの観光地に遊びに行ったらちょっと贅沢する。なんだか親が遠足気分
だったみたいで、楽しそうでしたよ。

季節の変わり目に、寝具の衣替えを兼ねて、今で言う「ママ友」達と小旅行
に出るわけである。寝具やら土産物やら、荷物を唐草模様の大風呂敷に包んで
背負って来る母の様子は、子どもの英愛さんから見ても「まるで子どものよう
に楽しそうだった」のだそうだ。その特別な時間が楽しければ楽しいほど、別
れの時は寂しい。だからなお一層、一生懸命働き、特別な週末に奮発する。そ

の繰り返しで月日が流れ、生活が進む。

中学二年の時に新潟にも朝鮮学校ができたので（1968年開校、初中級）、2年間は自宅から通うことができた。高校は東京北区十条の朝鮮学校に進学を予定していた。モラン寮という女子寮が併設されていたからである。ところが肝心の寮が英愛さんが入学するはずの年に閉鎖されてしまった。そのため、急遽、茨城県水戸市にある朝鮮学校¹³⁾に行くことになる。まさに民族教育を求めて日本各地を転々とした。

英愛さんは、茨城朝鮮初中高級学校を卒業（1972年）した後、短い期間であったものの学校の事務職についた。1年間、勤務すれば、大学へ進学できるという制度があり、それを利用して大学に進学したいと思っていたのだそう。新潟に配属されたが、数ヶ月で茨城の母校へ異動となった。久しぶりに地元に戻ることができ、仕事によりやく慣れた時だった。卒業した学校での勤務は気がすまなかったが、父に「組織の方針に従うように」と厳しく言われ、否応なく応じた。

そこで学生としても職員としてもお世話になった先生二人が職場恋愛の末、結婚することになった。英愛さんは同僚として、二人の結婚式に出席した。そのご夫婦の間に生まれた長女（慧瓊さん）が、後に自分の長男（明樹さん）と結婚することになる。もちろん、そんな未来が待っていようとは、この段階では想像もつかないことである。念願の大学進学は、1年間を勤め上げる少し前に身体をこわしてしまい、かなえることができなかった。

いろいろなことに思い悩んだ時期でもあった。もし、あの時のひとつひとつの選択が違っていたら、今とは全く違う人生になっていたのかな、とふり返ってみて思う。

3. 孝成さんと英愛さんの結婚

療養期間を終えた英愛さんは、当時、文京区白山にあった朝鮮出版会館内のキョンジットン（教職員組合）に就職することになった。そのビルには、在日

13) 1953年開学。茨城朝鮮初中高級学校。

本朝鮮青年同盟のほか、朝鮮通信社、『朝鮮新報』や情報誌『イオ』¹⁴⁾を発行する朝鮮新報社、仏教同盟、在日本朝鮮文学芸術家同盟¹⁵⁾、スポーツ関係の出版物を扱う部門など、出版に携わる組織が数多く入っていた。英愛さんが上京して働き始めてから一年ばかりが経った後、広島から東京に戻ってきた孝成さんが着任し、二人は出会った。

猿橋：アボジ（孝成さん）が声をかけたんですか。

孝成さん：この人（英愛さん）とね、お友達、ふたりでいつも一緒にいるの。

よし、飲みに行こうって、炉端焼き。誘うといつもついてくる。お腹すいてるから。（笑）

英愛さん：同じビルで若い人がいっぱい働いているから、そこで出会う。昔は今みたいに日本の人と（の結婚）はない。出会いもないし。組織の中にいるから。就職先が在日のコミュニティということは出会いもそこでっていうのが前提としてあるんですよ。外に出ていない分、むしろ結婚相手を探しやすいんです。

現在、二人が働き、出会ったビルはない。たくさんあった部門は存続してはいるものの、規模は縮小され、散り散りになってしまった。英愛さんは淋しそうな表情を浮かべた後、以下のように付け加えた。

英愛さん：でも、まあ、若い人に働き方の選択肢が増えていった面もありますね。昔は先生か組織か、そのどちらかしかなかったんですから。

英愛さんの5歳年上の兄は、高校生の時に単身で共和国に帰国する道を選択した。英愛さんが小学六年生の時である。子どもの頃はあまり一緒にいるこ

14) 1996年創刊。

15) 1959年設立。文学、音楽、美術、書芸、舞踊、演劇、写真、映画の部門をもつ。文芸同。

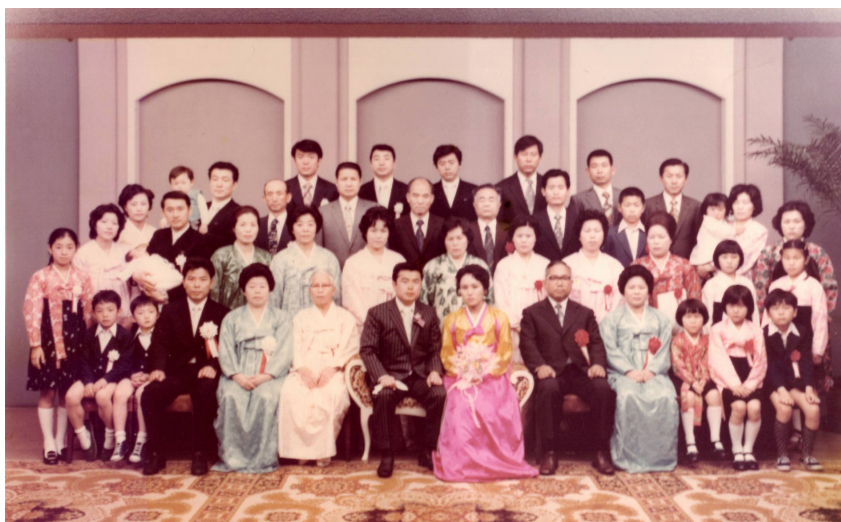
ともなかった兄が、寮生活をしている英愛さんに会いに来たのだそうだ。兄は北に帰ることをほとんど家族に相談せず、書類などもすべてひとりで整えたのだと言う。家族に告げたのは、出発の少し前で、父は自転車と行李ひとつしか準備してあげることが出来なかった。新潟港から船が出るとき、甲板にいる兄が最後に「母ちゃん！」と叫んだ声が、英愛さんの耳に今も残っている。

実は、結婚することになってから分かったことなのだが、英愛さんのお兄さんと孝成さんは同級生で、同じ高校に通っていた。

孝成さん：お義兄さんは同級生で、高校と寮が一緒でした。あまり勉強はしなかったんですけどね、みんなに好かれていましたよ。結婚することになってから、あの同級生、家内のお兄さんだったんだって。北に帰りましたけど。

英愛さん：その頃はね、日本にいても「やくぎになるか死ぬか」の世界ですからね。2回会いに行きました。ちゃんと生活してました。自分のところの電気が駄目だと隣の町の電気、そっちが駄目になるとこっちと、うまく引っ張ってくるんだよ、と話してました。それで自家発電機を送ってあげたり、お風呂を送ってあげたりね。父親は私より一生懸命送っていました。若くして行ったから不憫に思ったんでしょうね。

兄が北に発ってから、英愛さんは「自分は崔家のひとりっ子なんだ」と思って暮らしてきたと言う。結婚の申込みを受けたとき、英愛さんは「私はひとりっ子だから、親の老後の面倒をみないといけません。それでもいいのなら」と孝成さんに念を押した。結婚は1976年、孝成さん26歳、英愛さん21歳の時である。結婚式は東京と新潟の両方で挙げた。



孝成さん・英愛さんの東京での結婚披露宴（1976年）

結婚後、若夫婦はしばらくの間、家の近くに間借りをして暮らした。焼肉店を中心的に担うのは、ひき続き應烈さんと順子さんだが、英愛さんも手伝った。特に仕入れは家族の連携プレーだ。肉の仕入れは應烈さんの担当で、カルビとロースは家の近くの肉屋で手に入るが、ホルモン（内蔵肉）は車で品川まで買いに行く。豆もやしと豚足は上野で仕入れる。当時、孝成さんが勤務していた不動産会社から徒歩圏内だった。そこで、会社の終業時刻になると孝成さんが買い求め、三軒茶屋の地下鉄の駅で待っている英愛さんに手渡す。英愛さんが、それを持ち帰ると順子さんが調理を始める。豆もやしの処理などの下ごしらえは松亭さんの役割だ。手から手へと渡されて各地から集まってくる食材によって、千里は営業を続けてきた。

4. 出産と子育て

結婚した翌年、英愛さんは第一子を出産した。お産は新潟の実家で里帰り出産をした。雪の多い年だった。雪深い道を歩いたりしたせいか、予定日よりも

早くお産となり、2月5日、2500グラムと小さく産まれた。河家待望の長男の誕生である。実家の母は、産後の肥立ちによいからとわかめスープと鯉こくを作って飲ませてくれた。

猿橋：明樹さんは、どんなお子さんだったんですか？

英愛さん：良い子でしたよ。ひいおばあちゃん（松亭さん）もおじさん（英二さん）も一緒に大勢で暮らしてましたからね。

猿橋：それはお母さん（英愛さん）たいへんだったんじゃないですか？

孝成さん：全然！

英愛さん：なんであなたが言うの！？

孝成さん：何言われるか分からないから先手を打っておく！

英愛さん：（これまでも）大勢の中にいたから。新潟湯沢生まれだから。

孝成さん：（料理を）作り出したらうまい！普通じゃない！

子育てと家業を支えてきてくれた英愛さんに孝成さんは頭が上がらないといった様子だ。翌年には長女の明実さんが生まれる。

子どもの名前は祖父に名付けてもらおうと應烈さんをお願いすると「私はいいから、お前（孝成さん）が付けなさい」と言われた。分かりやすくていい名前。元気に育って欲しい。そういう願いを込めて、長男は「明るい樹」の明樹（ミヨンス）、長女は「明るい実」の明実（ミョンシル）と名付けた。孫の名付けを遠慮した應烈さんだったが、明樹さんと明実さんが産まれたことで、家の建て替えを実行した。明樹さんが3歳か4歳の頃だったと言うから、1980年頃ということになるだろう。

通りに面していた店の部分を壊し、駐車場を作った。「瓦屋根で窓の多い家」は順子さんたっての希望だった。当時はまだ、無煙ロースターが普及しておらず、肉を焼くと室内が煙で充満してしまう。換気のために壁の上部に窓を可能な限り取り付けた。そうしてはみたものの、窓を全開にしても煙は逃げていけないので、やがて窓は換気扇に取り替えられていったのだそうだ。いつし

か「換気扇だらけの店」になったが、それでも煙が店内に充満することは解消されなかった。換気扇がブーンと回る音、肉がジュウジュウ焼ける音、まだ幼かった明樹さんにとって「千里の音」といえばこのふたつなのと言う。

英愛さんにとっては店を手伝いながらの子育てだった。

英愛さん：お店がお客さんでいっぱいだと子どもたちにご飯も作ってやれなくてね、「待ってて」って言うから「僕もお客さんになりたいなあ」とね。
私には言いませんよ、叔母さん（末子さん）に言ってた。

明樹さん：でも昔はそんなに（焼肉）好きじゃなかった。特にカルビは苦手で食べられなかったんです。

英愛さん：よそに行って「キムチが美味しかった」とか言うんですよ。うちでも作っているのにね。

仕事を優先させなくてはならず、子どものことを後回しにしないでなくてはならないときの母の気持ちは切ないことだろう。親の事情が分かっているため、子どもは親に直接は言わない。親戚を介して耳に入り、幼心にも気を遣っていることを知る。

現在、英愛さんには孫が3人いる。明樹さん夫婦の子どもと、明実さん夫婦の2人の子どもたちだ。週末になると習い事の関係もあり、長女は子どもたちと一緒に千里に来る。明樹さんと慧瓊さんの長男、侑臣くんも、実は、あまり焼肉が好きではない。一番好きな食べ物はパンで、本音を言うと「うちがパン屋だったらよかったのに」と思うこともあるそうだ。その中でも好物はオンマ（慧瓊さん）が焼いてくれる焼きたてフレンチトーストである。演奏活動や指導で慧瓊さんが不在の時は、ハルメ（英愛さん）が焼いてくれる。帰ってくる場所がいつもあり、家族の誰かがいてくれることは心強い。その上、好物を覚えていて可能な限りリクエストに応じてくれる誰かがいてくれることは幸せなことだ。

5. 松亭さんの死

明樹さんが物心ついたときには、祖父母（應烈さん、順子さん）と母（英愛さん）は夜遅くまで店で働いており、父（孝成さん）は不動産業の仕事で帰りが遅かった。夜、家で過ごしているのは曾祖母（松亭さん）と妹（明実さん）の3人ということが多かった。認知症も発症していた高齢の曾祖母は、まだ幼い明樹さんにとっては怖い存在でもあった。

夜、トイレに行く時、松亭さんは廊下を壁に手をつきながら、ゆっくりと進んでいく。指につけていた結婚指輪が、痩せて緩くなっていたこともあり、壁にこすれて音を立てる。カチ…カチ…カチ…カチ…と静寂を破って聞こえてくるその音が幼い明樹さんにとっては恐怖だったのだ。

1985年5月、松亭さんが亡くなった。老衰だった。8歳だった明樹さんは、はじめて人の死と向き合った。

明樹さん：死というものに直面するのが初めて。ある日、朝起きたら「亡くなったよ」と言われて、ずっと一緒に暮らしていた人が亡くなって、死んでいる人の顔を見たのもその時が初めてで、トラウマになったみたい。夜驚症にしばらくなったそうです。

葬式は千里で執り行った。渋谷・世田谷地域で朝鮮料理研究家として名を馳せていた申小南さんが来て、台所を仕切ってくれた。松亭さんの死から、しばらく明樹さんは夜になると起き上がり、泣いたり叫んだりしながら家の中を歩き回らなくなってしまったという。明樹さんは、初めて人の死に触れたトラウマが原因と言うが、英愛さんは、四十九日を待たずに納骨してしまったことがいけなかったのだろうかとしばらく心に引っかかった。

小学校六年生の時（1989年）、明樹さんは生まれて初めて共和国を訪れた。当時は、平壤で開催される年越しコンサートに、在日コリアンの少年少女、若者たちが毎年200人ほど招かれていた。朝鮮学校の先輩たちから、その様子を聞いていたので、明樹さんもずっと行ってみたいと思っていたそう。歌で

オーディションを受け、訪朝する機会を得た。その時の体験を、明樹さんは次のように語った。

明樹さん：万景峰（マンボンギョン）号って聞いたことがあると思います。初代万景峰号と、その時期は三池淵（サムジヨン）号という2つの船が日本の新潟から朝鮮半島の元山まで出ていて、2泊3日かけて行きます。明け方に着くのですが朝鮮って「朝が鮮やかな国」と書きます。「朝鮮の歌」という曲があって、その中に「朝日がとても美しい」という歌詞があるんです。それを学校で習っていたので、船を降りる前の朝の景色が幻想的で、こんなに綺麗なんだと、歌に歌われているとおりの場所があるんだと感動したことを覚えています。それは鮮明な記憶です。

チョソネ ノレ
조선의 노래
(朝鮮の歌)

ア チ メ ヘ ッ ビ チ アルムダブコ コブタゴ
아침의 해빛이 아름답고 곱다고

(朝の日差しが美しく綺麗だからと)

ウ リ エ イ ル ム ル チ ョ ソ ニ ラ プ ル ロ ン ネ
우리의 이름을 조선이라 불렀네

(我らの名前を朝鮮と呼んだね)

イ チ ョ ロ ム キ ユ イ ハ ゴ アルダウン ネ ナラ
이처럼 귀하고 아름다운 내 나라

(こんなにも尊く美しき国)

イ セ サン ク オ デ チャジャボルス イッスルカ
이 세상 그 어데 찾아볼수 있을가

(この世界のどこに見つける事ができようか)

この明樹さんにとって念願の共和国訪問を、母の英愛さんは、すこし違う角度から捉えている。

英愛さん：明樹は感受性が強い子なんです。ひいおばあちゃん（松亭さん）が亡くなってからしばらく精神的に不安定になってしまって、夜驚症で夜中に家の中を歩き回っちゃう。睡眠薬を飲ませて寝かせていた時期もありました。それが向こう（共和国）に行って帰って来たらおさまってたんです。それから高校二年生の時も、先輩とふざけていて顔にパンチを受けて嘔み合わせがおかしくなったことがあって、顎関節症と診断を受けたんだけど、なかなか治らない。その時も、音楽活動で北に行って帰って来たら治っていた。「発音練習がよかったのかな」と話したりしましたけど。とにかく北に行くたびに体の不調が治って帰ってくる。だから、（理屈でない）何かがあるのかなって思っているんです。そういう風に、周りに助けてもらって、あの人（明樹さん）は成長していく、そういう人なんだなって。

猿橋：お母さんは送り出す時は心配ですね。

英愛さん：心配で新潟まで見送りに行ったりするんだけど、本人が「行きたい」と言うからしかたがないかと思って送り出すんです。でもよくなって帰ってくる。北に行くのが、いつもそういうタイミングなんです。だから、何かやっぱりあるのかなって。

「何か」をあえて言葉で表現しようとするならば「整える作用」と言い換えられるのかもしれない。根拠はない、非科学的なことに聞こえるかもしれないが、そういう因果を否定することもまた誰にもできない。

6. 千里、二代目へ

英愛さんが30代前半の頃（1989年代後半）、姑の順子さんが脳梗塞を発症した。厨房の要だった順子さん不在で、店の営業はできないため、しばらく休業せざるを得なかった。先行きが見えない中、口火を切ったのは英愛さんだった。

英愛さん：家族が食べていかないといけない。それで私、おじいちゃん（應烈さん）に言ったんです。「私、やりましようかね」って。それがその時（代替わりの瞬間）でした。

應烈さんと英愛さんは病院に入院している順子さんを毎日見舞っては、料理の手順を聞き取った。作業はずっとそばで見えていたので、どうにかこうにか調理する。店を再開したことを聞きつけて、常連さん達が待っていましたとばかりに食べに来てくれた。当時、ユッケは千里の人気メニューのひとつだった。肉をミンチのように刻み、甘めのタレが千里特有の調理法だった。「もう少し砂糖は多め」、「唐辛子がちょっと足りない」など、順子さんの味をよく知っている常連さん達がアドバイスをしてくれ、少しずつ千里本来の味に近づけていった。

やがて孝成さんも不動産業をたたんで店に入った。40代に入った頃（1990年代前半）だった。ところで、孝成さんはずっと前に調理師免許を取得していた。

英愛さん：（孝成さんが）焼肉やるって。肉切るのと、キムチ漬けをやるって。

孝成さん：キムチは塩漬けまでしたかなあ。

英愛さん：やらないでしょ。しかたがないから今まで私が30年やってます。

孝成さん：料理はだめだったねえ。一度だけ炒飯作ってみたけど、大失敗。それ以来、料理はやらない。調理師免許はもっているんだけどね。調理師免許取ろうって、試験場に行くでしょ。友達と悪さしようと話しながら行っただの。答え分かった方が韓国語で2番なら2番って言っても（日本人の試験官には）分からないだろうからって。そんな悪巧みしながら行ったら、私一番前に座らされちゃった。悪さできない。だから私は真正銘、実力で受かったんです。ちゃんと勉強したんです！

猿橋：それは、いずれは継ぐと思ってて？それとも親に言われて？

孝成さん：いや、親から一度も言われたことないですよ。免許はね、取れるものは取ろうと思っていた。不動産の資格を取った時に、調理師免許も将来的に要るかもしれないと思って。アボジ、オモニが店を始めた時はなかった資格だから。そう、だから貢献しているの、私。でもまさか自分が使うとは思ってなかった。

不動産業を起業するのに宅地建物取引士資格が必要だった。その時に調理師免許を取得したのは、資格試験については、取れる資格を取れる時に取っておくという発想があったそうだ。これは、孝成さんに限らず、流動性の高い都市を生きる人の处世術のひとつといえる。ばらばらだったはずのことがらが、時を経て、思いがけず結びつき合って、今の千里を支えている。

英愛さん：その後、アッパ（孝成さん）がやるってなってから、おばあちゃん（順子さん）が作るのを「はいストップ。今、何グラム」ってレシピにしたの。それまでは厨房でおばあちゃんが言葉で教えるってことはない。盗み見てたというかんじ。調味料、ここで何か入れているなって。教えてはくれない。

孝成さん：どんな職業にも基本があるから。それをしっかりやらないとね。

英愛さん：おじいちゃん（應烈さん）は明樹に教えたんだよね。タレの作り方。

明樹さん：そう、祖父が自分に教えるって急に言ってきたんですよ。亡くなる1年前に。

英愛さん：まだ結婚もしていない頃。

明樹さん：そう、家から劇団（金剛山歌劇団）に通っていた頃。

英愛さん：何を思ったんだろうね。

脳梗塞を何度か発症し、そのたびに入退院を繰り返した順子さんは、退院している間は半身麻痺の身体でも厨房に立ち、料理の作り方を家族に伝授した。そのことを経験した應烈さんは、いつ誰に何が起きるか分からないと思ってい

たのだろうか。ある日、孫の明樹さんと呼ばし、焼肉店をやっていく上で重要なタレの調合を伝授した。

猿橋：そうやって代替わりすることで、徐々に味も変わっていきますか。

英愛さん：やっぱりおばあちゃん（順子さん）の味が千里の味の基本なんですけど、今思うと法事（チェサ）で作るものが基本の味になっていますね。

英愛さんの実家では、父親が末っ子だったということもあり、チェサを仕切ることがなかった。加えて、英愛さんは小学校六年生から実家を離れて寮生活となったため、実家の母の味を受け継ぐ機会があまりなかった。だから料理は順子さんから仕込まれた。というより、順子さんの傍らで、見よう見まねで身につけた。

順子さんの味は、松亭さんから受け継いだ千里の味でもあるが、河家のチェサの味である。千里が代を継いでいるのは、家計を支えなくてはならないということや、日本社会では一般企業への就職が難しいことなども関係していただろう。他方で、河家でずっと続けられてきた祖先祭祀が、地域の人びとに愛される焼肉店を支えていることもまた事実である。

7. 千里、苦境をのりきる

ふり返れば、何度も苦境を乗り越えてきた。順子さんが病に倒れた時は正念場だった。2000年頃から狂牛病問題が世界的に問題となる。

英愛さん：狂牛病の時もたいへん。看板に「焼肉」って書くのをやめて「チゲと家庭料理」にしたのはその時。その時はね、何か考えなくちゃって、どんどんメニューを増やして今になったの。お客さんがついてくれて、雑誌にのせてくれたり。そういうのでどうにかもちこたえてね。一生懸命ね、営業、外回りも。よく（夫婦で）喧嘩もしましたよ。

家族経営であるからこそその強みも難しさもある。メニューを増やそうと考えた時期には、ひと月にひとつメニュー開発することを目標に頑張った。ヒントはテレビや雑誌、バイトさん達のアイディア、街の散策、調理器具の見本市、お客さんとの雑談など、どこからでも得る。

今の看板メニューのひとつである「もみシリーズ」も、最初のきっかけはテレビだった。それまで、ネギを刻んでまぶすことはしていたが、たまたまテレビで刻んだネギを乗せて肉を叩いている調理法を目にした。「こうしたら美味しくなるのかしら？」と疑問に思い、やってみた。ネギとニンニクを刻んで、その配分を調整したり、いろいろ試行錯誤をしているうちにもみ込む方法にたどり着いた。

お客さんへの提供も、注文の際に「試作メニューを試してみませんか？」とマスターが売り込む。客が承諾すると、たとえば4枚盛りの肉であれば、そのうちの2枚を「もみ」にする。その都度の対応になるので、手間はかかったが、食べ比べてもらっては意見を聞き、調整を重ねた。そうやって、一番お客さんの反応がいい按配をレシピとして、正式なメニューに加えた。

英愛さん：最初はおもみタンだけだったのが、そのうちハラミやカルビも入れて「もみシリーズ」ってしたんですけど、ネギやニンニクを刻むのが大変。仕入れ先の展示会で餃子を作る機械を見たときに、これで出来ないかなって。なんと、ネギを入れたら刻まれて出てくるから「わー、文明の利器だ」って感動しちゃって。それを導入してからはずっと楽になりました。でも、マスターも私も、実を言うとあんまりその味は好きじゃないんです。私はすったニンニクで味付けをした肉が好きかな。だから、よく出るから看板メニューになってますけど、なんでみんなこれが好きなのかしら、分からない。特に若い人達が好きみたいだから、ニンニクの刻んだのがインパクトがあるのかな、とか、ネギに焦げ目がついた味がいいんじゃないかなとか、不思議がっていたんです。

新しいメニューを思いつくと、まずは試作して、その日にたまたま来店しているお客さんにサービスとして食べてもらう。その反応を見て改良を重ねる。他方で、サービスしてもらったお客さんは、だいたい喜んで褒めてくれる。その評価が本音かどうか分からない。だから孝成さんは「身内の味見係」として時に厳しく評価する。そうして調整を続けて、「お客さんに広く求められるところ」に落ち着く。

料理の基盤はもちろん味なのだが、ネーミングも大事だ。目に入ってくる情報、若い人たちの感性、いろいろな声にアンテナをはって料理名を考え出す。

英愛さん：「辛い」っていうことを言うのでも、そのまま「辛い」と言うんじゃないくて「ファイヤー」って言ったらどうだろう、よし、これ使ってみよう、とかね。

そんな風に開発された千里のメニュー、そのひとつひとつにドラマがある。そういう思い出話をしながら、ふたりはどちらもともに「楽しかったね」と言っていて笑い合う。

英愛さん：この人（孝成さん）はお客さんから「マスター、マスター」って慕われてね、こんな調子で接客がうまいの。前の駐車場にお客さんが車停められるようにしていた時は「オーライ、オーライ、ストップ、はい、オーライ！」って。お客さんから「マスターどっちだよ！」って突っ込まれる。

孝成さん：だって、ちょっと足りないんだもん。用心深いから。

英愛さん：道路に出て車の誘導をするもんだから、「そのうちひかれるよ」とか言われながらね。お客さんと楽しそうに話していて、私は中にいるから分からないじゃない。後で「誰だったの？」って聞くと、「知らない人」だって。知らない人とも気兼ねなく楽しく話す。

孝成さん：そう、楽しくする。で、その後すぐ忘れちゃう。（笑）

英愛さん：いいお客さんに恵まれたよね。テレビにも出してもらったしね。

孝成さん：同級生が連絡してきて「お前テレビ出てたな」って喜んでくれたりね。

近隣に暮らす人達の直接的な支えもあるが、遠く離れていても応援してくれるのは、朝鮮大学校時代に出会った日本全国の同胞たちである。

1998年に、明樹さんが企画し金剛山歌劇団に所属する奏者家達と共に千里でライブをやった。朝鮮学校の仲間や地域の人を招いた。当時の写真には、満面の笑みを浮かべ、踊る應烈さんが映っている。明樹さんは、こんなふうにはしゃぐ祖父をはじめて見たのだそうだ。應烈さんのお姉さん、應禮さんも楽しそうに踊っている。

アルバイトを雇うようになって20年ぐらい経つ。家族だけで切り盛りしていた頃を思い出すと、アルバイトスタッフを入れられるようになって、労働としては随分と楽になった。食洗機、スライサー、カセットコンロの焼き台など、「文明の利器」も時代の流れに応じて取り入れてきた。一旦、導入すると、それ無しでやっていた時の手間がとんでもないことのように思える。「昔の人は偉かった」と敬意が湧いてくる。同時に、基本的なスタイルは、今も昔も変わっていないということも改めて気づかされると言う。

アルバイトの募集は、店の前に貼り紙を出しておくと来る。最近ではインターネットに求人広告を掲載するようになっていいる。駒澤大学など、近くに大学が何校かあるので、大学生や大学準備中の浪人生などもある。東京でひとり暮らしを始めた若者達にとってはまかない飯が大事なようだ。昼間掃除をしてビビンバを食べ、夜また働きに来てチゲ鍋を食べる。テールスープまたは牛骨スープをベースにしたラーメン、すいとんなどの麺料理も千里ならではのまかない飯だ。まかないは手早く作れてさっと食べられるものを出すので、レパートリーがあるわけでもないが、若者達は飽きずに食べている。

アルバイトで働いている時は、ひとりひとりの事情を詳しく聞くことはあまりない。営業終わりにスタッフを連れて飲みに行くが、日頃の労をねぎらうこ

とが目的なので、楽しく他愛のない話が多い。同世代の者同士、アドバイスしたり、励まし合ったりしている会話が耳に入ってきて、ここも彼、彼女たちにとって大切な居場所になっているんだなと気づかされる。

目指していた夢が叶って、店を去るとき、あるいはしばらく時間が経ってからお客さんとして食べに来て、事情を話してくれて、ああ、そういう事情があったのか、と感じ入ることもある。浪人しながら、親になるべく迷惑をかけないようにと働いていた子。私立大学に通いながら、経済的に自立しなければならない子。税理士や弁護士など、資格試験合格を目指して日夜勉強に励んでいる子。

社会人となって、友人を連れ立って食べに来てくれる。「あの頃、病気をしなかったのは、まかない飯のおかげでした」と言って懐かしそうにチゲを食べる姿にはっとして考えさせられる。BSE 問題が日本でも話題になりはじめた頃、お父さんがその分野の研究者だという学生が、京都に暮らすお父さんに連絡をとって「今、一時たいへんですけど、いずれ落ち着きます。大丈夫です」と言ってくれた。専門家の見解が聞けて心強かったのと、そういう風に心を寄せてくれることがありがたいと思った。

最近では、かつてアルバイトの面接に来たベトナム人の女の子が店に来た。目に涙を溜めている。聞くと、ビザの関係で入管に「今週中に国外退去をするように」と言われたのだと言う。「何か、日本にいられる資格はないの?」と聞くと「技能実習生一号」をもっていると聞いた。その翌々日、一緒に入管に行き、千里のスタッフだと説明して1ヶ月滞在猶予期間を延長してもらった。日本で暮らし続けられるように手続きや環境を整えた。一年に一度の更新をきちんとすれば、当面は日本で生活することができる。

英愛さん：頑張ってよく働く子なの。他人事に思えない。自分の子がそうになったらどうしようと思うでしょう。うちの近くにアパートを借りてね。佻臣のベッドを運んであげた。今は旧正月で5年ぶりにベトナムに帰っている。(写真を見せながら) ほら、(ベトナムの) 空港に着いて、お母

さんと5年ぶりに会えたって。「着いたら連絡するのよ、心配しているからね」って言ってあったから。ほらね、いい顔、しているでしょう？みんな頑張り屋さんだよ。働きながら、自分のしたいこと、しなくちゃならないことを成し遂げる。だから、他人事じゃないよね。知らん顔はできない。

明樹さん：店をやっていると、いろんな人に出会います。それで思うんですが、自分を大切にしている人は、周りを傷つけない、傷つけられないと思うんです。その辺が欠けていると悪い方向にいつてしまう。だから、自分を大切に出来ないと周りのことも大切にできない。

私たちはどのような立場であれ、知らず知らずのうちに助け合って、支え合っているのだと思う。

(つづく)